

S・エリス；T・セチャバ著

『反アパルトヘイト同志  
——亡命時代のANCと  
南アフリカ共産党——』

Stephen Ellis; Tsepo Sechaba, *Comrades against Apartheid: The ANC & the South African Communist Party in Exile*, ブルーミントン, ロンドン, Indiana University Press, James Currey, 1992年, 214ページ

楠 原 彰

本書は南アフリカの民族解放組織として1912年に出発し、もうすぐ新生南アフリカ共和国（以下、「南ア」）の政権党になろうとしているANC（アフリカ民族会議）と、21年に白人労働者階級の政党として発足し、ANCとの不即不離の関係の中で40年間の非合法時代を生きてきた南アフリカ共産党（以下、「南ア共産党」）との「関係史」である。

その関係の中でも本書では、ANCが非合法化され、メンバーの多くが亡命か投獄を余儀なくされる1960年から、マンデラ等の釈放と国内活動がゆるさる90年（南ア共産党もこのとき合法化された）までの30年間に焦点が当てられている。

著者のS・エリスは1953年イギリス生まれのアフリカ研究者、ジャーナリスト。現在はライデン大学のアフリカ研究センターに所属。もう1人の著者T・セチャバ（仮名）は、1976年に国外脱出してANCに加わり、南ア共産党員となったアフリカ人と紹介されているから、現在30～40歳のソウェト蜂起の世代と推測される。

セチャバはANCと南ア共産党が合法化される直前まで近隣諸国で地下活動に従事し、その後南部アフリカを離れたが、ANCも南ア共産党も辞めてもいなければ、追放されてもいず、現在もやはりANCの掲げる理念に忠誠を感じている、と共同執筆者のエリスは序文に書いている。

エリスはさらに「本書は1980年代の革命家であった1人の南アフリカ黒人の個人的経験・記憶と、すでに刊行されている資料ならびに他の人たちとのインタビューとをつきあわせて作り上げたものである」とも述べている。

本書はANCと南ア共産党との関係史と銘うたれているが、南ア共産党の歴史にウエイトがおかれ、誤解を恐れずに言えば、「南ア共産党のANC支配」の歴史を書こうとした書物であると言ってもよいだろう。その意味では本書は南ア共産党に対しては非常に厳しい見方をしているが、世界各国の共産党が次々と崩壊している中で、南ア共産党だけがどのようにして生き延び、なぜ今なおアフリカ人大衆の根強い支持を得ているのか、そういった問題を理解するには恰好の書かもしれない。

次に9章ある各章の内容の素描を試みてみよう。

第1章 「南アフリカ共産党 1921～50年」

ここでは、1921年の南ア共産党の誕生から50年の共産主義弾圧法による同党の非合法化までの歴史が語られる。南ア共産党はヨーロッパからの白人移民労働者（ブアー・ホワイ）の権利保護のために生まれた組織で、ヨーロッパの社会主義運動の影響を強く受けていた。結成と同時にコミンテルンに加盟。その後約70年間一貫してソ連共産党路線に従う。

低廉な黒人労働者の大量出現による白人労働者の賃金引き下げに抗議した1922年のストライキ（南ア共産党が指導）では、230人の犠牲者（衝突による死者）を生んだが、「白い南アフリカのために団結せよ」といった人種主義的プラカードも見られたという。

1924年の南ア共産党会議から黒人労働者を党員にリクルートする方針が決まり、28年には1950人の党員のうち1600人が黒人という状況にいたる。1928年はまたコミンテルンが南ア共産党に対して、「ANCを助け民族革命を」つまり「まずブルジョア民族革命を実現させ、その後に社会主義革命を実現させるように」という指令を出した年でもあった。

この頃からANCと南ア共産党の関係は親密化し、ANCの指導者は黒人共産党員（ジョシア・グメーデ、エディー・カイレ等）によって占められるようになった。

その後南ア共産党では人種主義的ソ連教条派が権力を握るが、3人の最高幹部がモスクワ訪問後、1938年から41年にかけてスターリンによって粛清されている(南ア共産党がそれを発表したのは、89年である)。

1939年南ア共産党は書記長にANCの活動家で黒人のモーゼス・コタネを選出した。コタネはその後39年間書記長職にあって、ANCと党の太いパイプの役割を果たした。

1948年アパルトヘイトを国是とする国民党政権が誕生するや、50年共産主義弾圧法によって南ア共産党は非合法化されてしまう(3年後に地下組織が作られ、同党の表記もSACPからCPSAに変えられた)。

党員たちはANC、SAIC(南ア・インド人会議)、CPO(カラード人民機構)、CD(民主主義会議)、SAC TU(南ア労組会議)に場所を移して活動を続けるようになった。

著者は次のような趣旨の結論を最後に述べている。「アパルトヘイト政権が南ア共産党を弾圧し非合法化したことが、さまざまな組織の中に共産主義の原理と方法を浸透させたと言えよう。そうでなければ、共産主義は南アではマージナルな位置に留まったままであったに違いない」と。

## 第2章 「民族の槍 1951～68年」

ANCは非黒人に支配されているという批判が内部から起こり、1959年ソブクエを中心にしてPAC(パン・アフリカニスト会議)が結成された。「アフリカ人のためのアフリカ」が彼らのスローガンであった。1960年3月のシャープビルの虐殺後、ANC、PACとも非合法化され地下活動を余儀なくされる。

ANCが軍事ゲリラ組織MK(民族の槍:ウムコント・ウェ・シズウェ)を結成するのは1961年である。政府施設等への破壊活動が試みられたが1962年にネルソン・マンデラが逮捕され、63年から64年にかけてANCと南ア共産党の幹部が次々と逮捕されていった。かくしてANCは拠点をタンザニアなどの独立アフリカ諸国に、南ア共産党はロンドンにそれぞれ移して戦いを続けることになった。

1960年代半ばはANC、南ア共産党にとって最も困難な時代で、両組織の分裂も時間の問題と思われていたが、それを救ったのは67年のアルバート・ルツリの

死後ANCの代表を引き継いだオリバー・タンボの指導力であったという。

1960年代はまた中・ソ対立が始まる時代でアフリカの独立諸国や解放諸組織も二分され、明確なソ連派であったANCにとっては、中国支持のタンザニア政府等との軋轢も大きかった。

ANCが再び国際舞台に登場するのは、ANC・ZAPU(ジンバブエ・アフリカ人同盟)の連合ゲリラ戦線がザンベジ河を越えてローデシア(現在のジンバブエ)へ侵入し、ローデシア政府軍と戦火を交えた1967～68年のことである。軍事的には敗北を喫したが、ANCの「武力闘争の名声と神話」、MKの若い指揮官「クリス・ハニの名声」を国際的に、またどこよりも南ア国内に広げたことに、この戦いは大いに貢献した(なお、そのハニもまた早くからの南ア共産党員であった。1991年から書記長に就任していたが、93年4月白人の右派の凶弾に倒れた)。

ANCは亡命によって国際政治の感覚を身につけ、南ア共産党と合体することによって理論的な長期展望をもつことができたという著者は書いている。

## 第3章 「南ア共産党の勝利 1967～75年」

1969年4月タンザニアのモロゴロで開催されたANCの会議(モロゴロ会議)は重要だった。ANCの非黒人に対するオープンメンバーシップ制が採用されたと同時に、南アの解放闘争の拠点は都市のタウンシップであるという規定がなされた。また、ANCと南ア共産党の合同機関として1960年代につくられていたRC(革命評議会)が正式に承認され、最も著名な南ア共産党指導者のジョー・スロボが非黒人メンバーの1人に任命された。

1960年代後半から70年代初頭にかけて、南ア国内で、スティーブ・ビコ等によって率いられた黒人の学生・青年たちによる「黒人意識運動」が起こるが、国外にいたANCや南ア共産党とのつながりはほとんどなかった。

この黒人意識運動は、1976年のソウェト蜂起をはじめとして、その後の解放闘争に大きな思想的影響を及ぼすこととなる。

南ア共産党はビコ等の運動を「危険な異端」と見なしていたようだ。1970年代後半旧ポルトガル領のアン

ゴラ、モザンビークが、またイギリス植民地のローデシアが解放されるにおよんで、ANCと南ア共産党は闘争の拠点を南アに隣接するそれらの地域に移していった。

この新しい戦いを担っていくのが、1976年のソウェト蜂起以来陸続と南アから亡命してきた「ソウェト（蜂起の）世代」と呼ばれる若い青年や学生たちの群れであった。著者は本章でモロゴロ会議以降南ア共産党がANCの実権を握るようになり、スターリニスト的運営方法がANC内部で顕著になったと述べている。

#### 第4章 「ソウェトからアンゴラへ 1976～79年」

思想的に「ソウェト世代」に近かった同じ亡命解放戦線のPACが彼らを受け入れて飛躍・再生できなかったのは、止むことのない内紛のためだった。1977年初めには4000人にも達した若い亡命者の多くを受け入れたのはANCである。彼らは武器をもって再び祖国に戻る覚悟を決めてANCに入ってきた若者たちであった。

1976年からアンゴラ内部にANCのゲリラ訓練基地がつくられ、79年にはタンザニアに亡命者たちの学校がつくられた。こうした国外の隣接基地から訓練を受けた若者たちが1970年代末から南アに戻り始め、タウンシップに潜入し、多様なサボタージュ作戦を開始する。ANC、南ア共産党はこれをベトナムの解放闘争に学んで「人民戦争」と呼んだ。

一方これに対して、「適応（改革）か死か」を掲げて1978年に大統領に就任したボタは軍主力のSSC（国家治安評議会）を設置し、近隣独立諸国に、ANCやSWAPO（ナミビア解放戦線）支援を断念させるべく、軍事介入を含む傍若無人の「不安定化工作」を採ることになる。

#### 第5章 「不安定化工作 1980～83年」

1981年1月のレーガン・アメリカ大統領の誕生を境にして、南ア軍特殊部隊による近隣諸国への越境攻撃、鉄道をストップさせるなどのサボタージュ、アンゴラ、モザンビークの反政府ゲリラへのテコ入れ、経済封鎖、また治安部隊によるANC幹部の暗殺等々の、ボタの言ういわゆる不安定化工作が本格化していく。

#### 第6章 「ANC内部の反乱 1984年」

1982年からMKの戦術はANCの軍事力を宣伝する

ための国内でのサボタージュ戦術に変わった。またRCは1983年からPMC（政治軍事評議会）と名前を変えている。

ANC内部の治安機関の過度の詮索と貧弱な施設や訓練への不満、まずい食べ物と娯楽の欠如への不満、南アに戻って戦いたいというゲリラたちの募る願望、などがくすぶっていたアンゴラのANC基地で、1983年兵士たち900人の反乱が起こった。ANCのゲリラ兵たちは南ア軍と戦うのではなく、アンゴラの内戦にかりだされ、反政府軍のUNITA（アンゴラ全面独立民族同盟）と戦わされていた。しかし、1984年反乱は鎮圧され、反乱軍のリーダーたちがANC治安部によって処刑された。また、RCやPMCの施設がANCの「不平分子」や「スパイ」の拘禁センターとなった。この動きの背景には、南ア共産党の秘密主義が存在したと著者は書いている。

#### 第7章 「タウンシップの闘いの高揚 1984～85年」

1984年から86年にかけて都市の黒人居住区（タウンシップ）で未曾有の黒人蜂起が起こった。組織の中心はANCに近い反アパルトヘイト連合体のUDF（統一民主戦線）だった。最盛時UDFには700の組織に数百万人のメンバーが結集した。ANCはこの民衆蜂起を利用して、南アを「統治不能に追いやろう」と宣伝した。

1985年6月ザンビアでモロゴロ以来のANC大会が開催され、国内の住民・市民組織とPMCを結ぶ「第二戦線」の結成が決定された。それはMKのネットワークを国内各所に張り巡らす役割を与えられた。

この大会で選出されたANCの全国執行委員30人中、非共産主義者はO・タンボ、T・ンコビ、P・ジョーダン等わずか8人だったと著者は報告している。

1986年には全国に非常事態が宣言され、上半期だけで2万4000人が逮捕・拘禁され、まさに「統治不能状態」が出現しようとしていた。政府に支援された反UDF、反ANCの武装傭兵（自警団：ビジランテス）が登場し、残虐のかぎりをつくし始めるのは、この頃からである。

#### 第8章 「非常事態 1986～87年」(略)

#### 第9章 「軍人と外交官 1987～90年」

冷戦の終わりとソ連によるANC・南ア共産党への

支援の終了、1987～88年アンゴラのクイト・カナバルの戦いで南ア軍の敗退、ナミビアの独立、南ア財界の経済危機感、前線諸国の疲弊と和平の希求、などの要因が、89年9月のデクラーク大統領の出現を促した。1988年12月ニューヨークでアンゴラ、ソ連、キューバ、アメリカ、南アの代表によって調印されたアンゴラ・ナミビア和平協定こそが、南部アフリカにおける和平への出発点だった。そうしたさなかの1989年南ア共産党は第7回党大会を開き、J・スロボを書記長に選出した。著者によればソ連に追隨してきた同党は新しい南アの情勢もその後の東欧・ソ連の情勢も、全く読めていなかったという。

著者は、デクラーク以降の新しい状況はANCに対する南ア共産党の影響を減じさせると述べたあと、結論の終わりの部分で、東欧・ソ連の共産党支配体制の崩壊後の今も、南ア共産党はこれまで掲げてきた「民主集中主義」、「労働者による生産手段の独占」、「経済の国有化」等といった課題について、まだ民衆に答えていない。南ア社会主義の新しい定義が示され

なければならない、と結んでいる。

ところで、1993年6月初旬の現在、南アでは新憲法制定までの手続きを協議する26団体が参加しての複数政党会議が開催されている。ここで来年4月末までに「制憲議会選挙」を実施することがようやく合意された。この会議にはANCも南ア共産党も参加している。現在、ANCの全国執行委員50人のうち、南ア共産党員は22人を占めるという（『毎日新聞』1993年4月4日）。

南ア共産党が掲げてきた「二段階革命」の前段が曲がりなりにも実現しようとしている今、皮肉にも同党が最も依存してきた東欧・ソ連の社会主義体制が完全に崩壊した。国有化も、権力集中体制も引込め、新体制のもとでは社会主義路線を採らないと明言しているANCのマンデラ議長および彼の柔軟路線を支持するメンバーと南ア共産党員との関係は、今後どのように展開するのだろうか。残念ながら本書からそこまで読みとることは難しい。

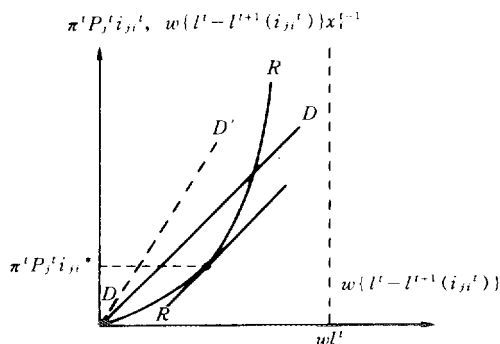
（国学院大学教授）

# 訂 正

本誌前々号（第34巻第10号）所載の松尾昌宏「複線型成長下の国民経済の形成」中に、下記の誤りがありましたので訂正いたします。

誤

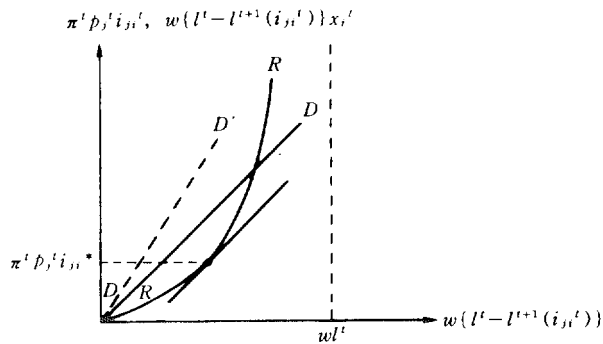
第1図 投資コストと、生産性上昇からくる利益



（出所） 筆者作成。

正

第1図 投資コストと、生産性上昇からくる利益



（出所） 筆者作成。